

南支

第三次浙江作戦に参加して

滋賀県 武村 正男

昭和十九年九月三日午後一時、上海の呉淞棧橋を離れた大発型砲艇、そ四、そ五、そ七、そ十と舟山島警備隊の二隻の計六隻は、掃海のため海防艦安宅に曳航され九月十日午前十一時、南支那海の温州入り口に到着、午後一時掃海を開始した。舟山島警備隊の艇には新聞記者が同乗していた。

網に機雷に係るのを今か今かと見詰めていた時である。信号兵で見張り担当の荒木上水が突然「彼我不明飛行機」と叫んだ。望遠鏡で覗いている。肉眼では見えない。続いてP51五機、平井兵曹は直ちに「対空戦闘配置に付け」と号令した。

私は急ぎ電信室に飛び込んだ。レシーバー（受聴器）がけたたましく鳴った。ウナウナウナ（作戦特別緊急電報）、宛そ七号、発そ五号。受信の了解を出そうとするも相手は連続送信三回、終わりでふつつり切れた。急ぎ解読し杉本指揮官に届ける。電文は「機関停止、負傷者多数、救援頼む」。これを見た杉本掃海指揮官の顔色はなかった。瞬間私はちらっと前方を見た。火柱が高く黒煙ももうと二箇所上がり、一隻は前半分だけ見え、もう一隻は火柱、黒煙だけ。

「直ちに救援に向かう」と打電するも応答はなかった。三時四十五分から十五分間の出来事であった。ふと私は、飛行機の搭乗員を三年訓練するのは二十分の役に立てるためだ、と言った先輩の言葉を思い出していた。

そ五号艇の重傷者は富樫中尉、佐渡上曹、吉升二曹、西島上水、軽傷者は小谷兵曹長で通信の途絶えたのは、銃撃による浸水のため排水作業や負傷者の手当等で手が

回らなかつたからであつた。

舟山島の二隻の乗員は爆発の寸前、海に飛び込んだらしい。新聞記者だけが泳げなかつたので皆が一緒につれて陸の方へ泳いでいたが、陸上から銃撃を受け沖の方へ反転した後はぐれてしまつた。そ七号艇で調査の結果、記者のほか兵二人が不明であつた。泳いでいた時元氣に見えた人々も救助された瞬間ぐつたりと死人のようになる。全身を使い果たして死線の境をさまよう姿を眼前に見た。応急の警備編成をして三日後、その付近を通つたとき、新聞記者の水死体を発見した。カメラ、時計を遺品とし水葬の礼をした。

翌朝掃海を再開。引潮の流れの中にあつた、あつた。探し求めていた機雷が「一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ」とあるわ、あるわ。平井兵曹長は夕べあの上を走り回つたんだと事もなげに笑つたが、誰言うともなく「ヒャー」と悲鳴にも似たような声が出た。

機雷を爆破するため「ジャンク」を雇つて辻兵曹、渡辺上水の二人が同乗。一〇〇呎くらい離れてスイッチを入れると、水しぶきが五〇呎くらい上がつて機雷は次々

と消えていった。初めは恐れていたジャンクの人たちも帰りに塩一袋、フカの塩漬一樽をもらい「謝々」といつて帰つていった。

洗面器一杯の水で洗面から禰まで洗い、スコールをみては裸になつてタオルと石鹸を手に甲板で汗を流した。罐詰ばかりの副食に足がむくれ「カッケ」の出る生活だったが、九月二十五日やつと上海の江南に帰投した。隊内にはすでに先の重傷者、護送中の四氏の遺影が飾られ、出迎えた戦友もわれわれの無事帰還を喜んでくれた。

今は精魂つき果てて死んでいった戦友の姿を思い浮かべながら、平和の有難さを喜ぶとともに犠牲となられた人々の事を忘れてはならないと思つ。

西路作戦

島根県 井上光雄

我々の第五師団（広島）は昭和十四年の暮れに広西省南寧を攻撃し、敵の残された重慶に対する補給路を遮断